

# 江戸時代の朝鮮通信使の航海について

## -対馬宗家文書「信使記録下向船中毎日記」を事例として-

古藤 泰美\* 田口 由香\*\*

### Voyage of the Delegation from the Korean Yi Dynasty in the Edo Period : Over "the diary on board of the Chosen Tushinshi "

Yasumi KOTOH\* Yuka TAGUCHI\*\*

#### Abstract

The government official of "the Tsushima Clan" joined "delegation from the Korean Yi dynasty", and has kept a record of the voyage by making "a diary on board." By investigating the record, the voyage of those days in the "sea route" from Pusan to Osaka could be known. In this research, the contents of "the diary on board of the Chosen Tushinshi" which are record of the 11th "delegation from the Korean Yi dynasty" in 1748 are analyzed. As for "the diary on board of the Chosen Tushinshi", the voyage from Osaka Kawaguchi to Katsumoto in Iki, July 4 to July 17, was recorded by the lunar calendar of those days. The content showed the port called by "delegation from the Korean Yi dynasty" and the time spent on the voyage. And the distance of the voyage was able to be found from the present chart, and also the speed could be guessed. So we can guess the voyage and current of those days by investigating "current data", by "Maritime Safety Agency", which showed current of those days.

Keyword: Chosen Tushinshi, Voyage, the Edo Period, the Tsushima Clan

#### 1. はじめに

江戸時代においては、主に北前船が国内を航行し、当時は鎖国をしていたため、外国から来航する船は、朝鮮通信使の一行が、現在の釜山から対馬経由で玄海灘を渡り、瀬戸内海に入り大坂まで乗船する船のみであった。

現在の朝鮮半島（韓半島）からの最初の使節は、668年から8世紀後半まで続いた。その後、朝鮮半島では南北朝が統一されて室町幕府が安定した頃の、1404年に三代将軍足利義満により国交が再開された。その後、豊臣秀吉の朝鮮侵略により再び、朝鮮半島との交流は途絶えてしまった。その後、関が原の戦いに勝利した徳川家康は、対馬藩主の宗家を通じて国交回復を求める使者を、その当時朝鮮を支配していた「李王朝」に度重ねて送っている。朝鮮国王も「信義に基づく国交でありたい」との意味の「朝鮮国王の国書」を持たせた使節団を、1607年（慶長12年）に日本に派遣し、公式に、「江戸幕府」と「朝鮮国王」との国交が回復した。その後、1811年（文化8年）までの間に「朝鮮通信使」は12回にわたり日本に来航している。

「徳川幕府」に対する警戒心と、豊臣秀吉による朝鮮出兵による「戦後処理」をする目的で、3回目までの、朝鮮からの使節団は「朝鮮通信使」の名称は使用せずに「回答兼刷還使」と呼ばれていた。1636年（寛永13年）になり、初めて「朝鮮通信使」と呼ばれるようになり、それ以後の8回の日本への来航は、「徳川将軍」の代替り

を祝賀する使節として、日本に来航している。

「朝鮮通信使」の一行は、釜山から大坂までは「海路」を使用し、淀川を川舟で遡り、そこから江戸までは「陸路」を使用している。

「対馬藩」の役人は「朝鮮通信使」に随行しており、その様子を「船中日記」に記録として残している。その記録を調査することにより、釜山から大坂までの「海路」における、当時の航海の様子を知ることができる。本研究は、1748年（延享5年、寛延元年）の第11回目の「朝鮮通信使」の記録である「信使記録下向船中毎日記」（対馬宗家文庫、長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵）の内容を解明したものである。「信使記録下向船中毎日記」は、当時の旧暦で7月4日から7月17日（新暦では、7月28日から8月10日）までの大坂川口から老岐の勝本までの、航海の様子が記録されている。その内容からは、「朝鮮通信使」のその間の寄港地と入出港時刻、その航海に費やした時間がわかる。よって、現在の海図から距離を求めることで、その間の速力を推測することができた。また、「信使記録下向船中毎日記」と当時の潮流がわかる「海上保安庁」の「潮流データ」により、当時の航海と潮流の関係を推算することができた。